

## フィールドワークの可能性を求めて

### Toward the Possibility of Field-work

渡 辺 牧\*  
Osamu Watanabe

#### 概要

フィールドワーク実践への視座の基礎的検討を行い、後半で個人生活史のインタビューについて考察する。生活現場に入っの参与観察型の調査研究では相対化認識の視点構築と共に、第1に「自明性の背後を問う」過程での作業仮説の形成、第2に他者理解のためのインタビューが重要な技法となることを論ずる。生活史のフィールドワークでは、特攻隊員の生と死の記録、戦災孤児から画家を志した事例など、戦争体験に関わりのあるインタビュー記録を紹介し、現代における日常と極限状況に関し考察し、フィールドワークの可能性を問う。戦中世代は「戦争からの生き残り」という重い問題と、「戦後の生活の再構築」について語ることで、生活史の全体像、困難を極めた戦争体験を伝えようとする人が少なくない。

最後に、フィールドワークと生活世界の関係性、その実践的学習方法などを考察する。

**キーワード：**フィールドワーク、自明性の背後、相対認識、他者理解、極限状況

---

\* 基礎教養科目担当

## 1. フィールドワークの視座—自明性の背後への問い

フィールドワークに取り組む視座の基礎的検討を行い、後半では、信州で行った個人生活史のインタビューについて考察し、実践技法としてのフィールドワークの可能性を問いたい。

ジャーナリストとしての取材活動、フィールドワーカーの調査研究にとっては、問題の客観的な「相対化」認識を進めるための作業仮説の検討、視点構築が重要な課題である。同時に、フィールドワークの成否を左右するのは、取材、調査実践の進め方であり、重要情報提供のキー・パーソンとの出会いとラポールの形成は至上課題であろう。

フィールドワークには、生活現場に入っただけの参与観察型の調査研究の中、事実発見の作業と「自明性の背後を問う」中で、新たな作業仮説を形成していく。

インフォーマントとの共同作業を通じての事実発見からは、従来の理論パラダイムの再考、見直しに通ずる示唆を得られることも少なくない。

定説が、科学的根拠を欠落の悪しき俗説に陥っている例は少なくない。今日の問題を挙げれば、「東アジアの奇跡」、「経済大国」、「ルック・イースト」と、バブル崩壊前の日本社会は、経済的繁栄が喧伝された。しかし、繁栄と見えたものは社会の表層であり、深層は社会矛盾が拡大していた。「失われた十年」を経て、深刻化する不良債権、失業問題など、「塞がれた道」を呈している。

自明であったはずの「経済的に豊かな日本」が、ほころびを見せたのは、社会通念としての「当たり前さという自明性」の認識が、スローガンの域を出ていなかったことを物語っている。

社会科学は、民衆の暮らしの幸せのための「経世済民」実現のための実践の学である。アダム・スミスが「国富論」で、分業の有効性、経済の倫理を平易に説いたのは、生産の効率化、公正な経済活動こそが、民の豊かさに直結を洞察していたからである。

社会学のルーツは、近代ヨーロッパの市民革命、産業革命などの社会思想と、カント、ヘーゲルのドイツ観念論などの哲学の「書斎」の思弁とクロスしており、その観念論の影響は今日の社会学にも見られる。静かな営みとしての思索、哲学に通ずる思弁的な考察のプラス面は、近視眼的な「損か得か」の功利主義を打破のパワーを秘めている。カント、ヘーゲルの「人間の理性」を訴えた哲学、ヘーゲルの「法の哲学」での「主体が力を発揮のための媒介の重要性」の考察は、時代を超えて哲学的考察の大切さを伝えていよう。

思弁哲学のマイナス面は、思索を重んずるが故の「荒々しく生臭い現実と相まみえることの逃避」であろう。正確に言えば、哲学は「思索の学」、「街に出て現実との格闘からの研究はフィールドワーカー」という区分けが今日の実態であろう。

## 2. 他者理解の視座

フィールドワークでは、他者理解のためインタビューが重要な技法である。生い立ち、職歴などの客観的な事項を聞くだけではなく、インフォーマントの心情、将来への願望など内面世界まで聞きとる努力を重ねることが問われよう。ただし、ラポールを踏まえた究極のインタビューの理想的あり方は、質問に答えるという形を脱し、相手が自ら自発的に自由に語り出したことがらを、フィールドノートに記録することではあるまいか。

初期シカゴ学派を切り開いたR. E. パークは、産業化が激しく進むシカゴで、教え子たちに「現実には相まみえること」「生きた社会に視野を開くこと」を訴え続けた。

彼にとって、フィールドとしての都市は、参与観察研究の生きた実験室であり、街頭を歩き、民衆の声に耳を傾ける中で、人々の厳しい生活問題、社会矛盾についての「問題発見」に力を注いだ。彼は、街に分け入った現実の直接観察、想像力を働かせての他者理解、心に映った社会の理解を志向した。人間は「役割演技」により一種の社会的仮面を身にまとうが、仮面の背後の理解なしに他者理解は困難なことを訴えている。

抽象度を高めた社会理論と、現場の調査研究、フィールドワークとの間には大きな乖離が拡大している。これまで、社会学で論争されてきた理論には、フィールドワークでは検証困難な「巨視的な問題」が少なくない。

「個人が先か、社会が優先か」についての、自然法と社会有機体説の論争。「社会の秩序優先か、個々人の生の意味が重要か」に関する、社会システム論と現象学的社会学の視点の隔たり。巨視的問題を、生活世界の現場から再考するための有力な手法として、フィールドワークが試行されてきた。

## 3. 現代における日常と極限情況

後半で挙げるフィールドワークを通じ、一見平穏な日々の暮らしの中に、かつての戦争の極限情況の影が投影されていることを痛感した。一見平和な時代に、戦争体験を暮らしの中で口にする人々は激減しつつあるが、戦中を生きた人々に個人生活史をインタビューすると、戦争体験の傷跡を語り始める人が多い。

「戦争からの生き残り」という重たい問題と、「戦後の生活の再設計、再構築」という生活者としての原体験を語らずに、戦中世代の生活史の全体像は伝えられないのである。

戦争体験を主題に設定したインタビューではなく、今の職業や地域生活などに関する聞きとりをお願いした場合でも、戦争体験についての話が出てくることが多いのはなぜか。「困難を極めた戦争体験を語り伝えたい」思いが強く宿されているという仮説を呈示しよう。

人間の歴史は、安らぎある日常を理想としつつも、戦争、災害、凶悪な事件などの極限状況に生活世界が絶えず脅かされてきた。敗戦後の日本社会は、極限状況としての戦争の傷跡からの再建をめざして歩み始めた。そこでは未来に向けての民主主義の実現、経済面の再建と共に、日本が犯した15年間の戦争責任の客観的な問題解明、戦争によって人生が破砕された人々の問題についての解明が不可欠であった。

しかし敗戦後の日本社会は、戦後直後の窮乏と混乱の時期を経て、経済成長期に入り、欧米先進国へのキャッチ・アップが至上命題の中、いつしか戦争体験は風化していった。エンツェンスベルガーは「玉子踊りのジャーナリズム」と状況変化に右往左往のメディアを揶揄したが、日本社会にも同様の問題性が見られたのではあるまいか。

戦後の出発点であるべき「戦争体験」に対して、その負の全体像を客観的に相対化し抜く検証作業は徹底して行われたのか。戦争体験の検証とは、戦争の犠牲者の数、経済的損失といった数値的に調査可能なものだけではなく、戦争で個々人が受けた心の傷跡、極限状況における人々の多様な内的体験に耳を傾け、記録し、「戦争の災厄」を明るみに出す営みであろう。

平穏な日々の暮らしが破砕される極限状況は戦争だけではない。

家族みなで食卓を囲む夕餉の温かな風景。「行ってきます」と家族が出発の朝の光景。こうした平穏な日常生活が、ある日、一瞬にして破砕され、暮らしが一変する厳しい有様は、阪神大震災、三宅島などの災害、北朝鮮拉致事件、連続企業爆破事件、地下鉄サリン事件などでも見られた。

#### 4. 揺れ動く地域社会のフィールドワーク

筆者は、地域情報メディアの実態と課題、各地の村おこしと草の根からの住民たちの国際協力運動、地域福祉の実態に関するフィールドワーク研究を各地で重ねてきた。まちづくり運動に関し、社会学の視点から実証研究を進め、住民参加型のまちづくりとお年寄りや障害者、児童を大切にしたい地域福祉のあり方について考察を重ねた。フィールドワーク教育を通じて、学生に学びへの楽しさと情熱喚起、様々な社会の諸問題への問題意識の啓発を図ってきた。

今日、日本社会では市町村合併などをめぐり、各地で自治体運営の効率化、住民生活における地域福祉の充実策のあり方、住民の意思がいかに関心されるかが問題になっている。市町村合併に関しては、国、県の方針と住民の意思の間で、各地の首長たちの中には板挟みになり苦悩が深いという実態や、住民の思いは行政の既定の路線とかなり違うという世論調査結果も散見されている。

フィールドワークで旅すると、各地の風土の違いとそこに起因する住民気質、生活文化

の差異に目が開かれる。

地域社会とは、地域の自然環境、歴史文化、地場経済などが有機的に織りなす生きた小宇宙であり、地域的個性（ローカリティー）がそこでは歴史の中で、はぐくまれてきた。次に見る3編は、長野県の松本平出身者、もしくは在住者をインフォーマントとして、2002年にインタビューした記録である。松本地方は、北アルプスを望む山岳地域で、風光明媚だが、冬季の冷え込みなど自然条件は峻烈で厳しい。住民気質は極めて真面目で、文学、美術、音楽など芸術文化、研究活動への理解が深い風土であり、芸術家も輩出している。本稿で見る戦災孤児出身の画家が、安曇野を創作拠点として根を降ろしたことや、日記の文化運動への地元の理解が深いことは、風土的環境との相関も少なくないだろう。

### 5-1. 特攻隊員の生と死の記録

以下は、太平洋戦争末期に特攻隊員として戦死した長野県松本平出身の青年の生と死に関する報告である。戦死した青年を偲ぶ集いが2002年に都内で開かれ、「戦争のむごさと平和の大切さを故郷松本の若者、児童にぜひ伝えていきたい」と語り合った。その集いの後日に、青年の末妹を中心にインタビューした。

昭和20年5月11日、穂高町出身の上原良司さんは陸軍特別攻撃隊員として、沖縄嘉手納湾の米軍機動部隊に突入戦死した。まだ22歳の若さだった。上原さんは旧制松本中学卒業、慶応大学に入学、18年に松本第50連隊に入隊した。イタリアの哲学者クロチエに共感し人間味豊かな自由主義を愛していたが、軍国主義下、特攻隊員を命じられ、「毎日毎日が死を前提としての生活」（遺書より）という極限状況の中、沖縄の海に散った。

この追悼の集いには、松本平出身者20名と、上原さんの末妹で松戸市在住の、と志江さんが招かれ、生前の思い出を語り尽くし、自由と平和の意味を再確認した。丸山和道さんたちは「上原さんは生きていたら今80歳。2度と戦争を起こしてはならない」と追悼。と志江さんは「太平洋戦争で3人の兄を亡くした。陸軍の軍医だった長兄はビルマで、海軍軍医の次兄は南方で戦死。3番目の良司兄さんは、大学の経済学部に入学した年に、学生の徴兵猶予が取り消され軍隊に入営した」と語った。

良司さんの父、寅太郎さんは穂高の有明村で、有明医院の医師を務め、医療に一心に励み厳格な人だったという。当時の同村に医師は2人のみで、寅太郎さんは地域医療に打ち込みながら子供を育てた。と志江さんは「兄は3人とも大正時代の生まれで、上の兄2人はとてもまじめな性格で、良司兄さんはふざけたり冗談が大好きでほがらかだった」と回想した。良司さんは音楽が好きで、北アルプスを眺めながら、よくハーモニカで英国の歌曲などを吹いていた。松本中学時代は、スキーをかつぎ大糸線に乗り、大町のスキー場に通った。戦後、と志江さんは兄の形見のスキーをはき、女学校のスキー教室で滑ったが、

兄を思い出し悲しかったという。松本連隊入営前は、帰省すると、ベートーベンの「運命」のレコードもよく聴いたという。

「兄は陸軍航空隊に入り、特攻入りが軍隊の上から決められると反対はできず、鹿児島  
の知覧から飛び立って戦死しました。穂高に帰郷し常念などの山々を目にするのが辛い。  
山の風景は昔と同じだが、3人の兄は帰らぬ人となった。山を見ると兄たちを思い出す」  
と涙して偲んだ。戦死した兄3人の眠る墓碑は、父の故郷の松本市和田、万年寺に建立さ  
れている。

特攻作戦は昭和19年秋から始まり、学徒兵も特攻隊員になり前線に送られた。建前では  
あくまで、特攻は志願とされたが、実際は拒否できなかった。良司さんは、19年12月に佐  
賀県の基地に送られ、特攻の実戦訓練に明け暮れた。

特攻兵として出撃直前の4月、最後に有明村に帰ったとき、妹に「日本は負けるよ。自  
分は靖国神社には行かず天国に行く」と言い、大声で3回「さよなら」と言って、生まれ  
育った松本平を後にした。この最後の帰郷のとき、有明村の幼友達と親戚をそれとなく訪  
ねていた。後に母は「良司は帰ってこない。死ににくんだよ」と娘たちに語ったという。  
と志江さんは、良司さんの命日の5月11日に、飛行場跡に作られた知覧の特攻平和記念館  
を訪ねた。出撃した順に特攻兵の遺影が展示され、氏名が刻まれた石碑が建立され、良司  
さんの遺書のコピーも展示されている。「今の若者の中には、特攻隊って格好いいと勘違  
いしている人もいると聞く。そうではなく過酷な極限状況だった歴史を知ってほしい」と  
語った。

## 5-2. 特攻隊員の生と死に関する考察

戦争や災害などの極限状況に直面し亡くなった個々人の記録は、日記、手紙、遺書など  
書かれたものと共に、生前に彼らと面談、交流した親族、友人らの思い出が貴重な情報源  
となる。

特攻隊員になることを拒否不可能な状況に身を置かざるを得ず、特攻兵になって以後は  
「死と直面の毎日」を強いられる中、この青年には、戦争と軍隊に対する強い抵抗意識が  
うかがわれる。沖縄での出撃直前に「日本は戦争に負ける。自分は靖国神社には行かない」  
と身内に言い残したことが、その証左である。自由な言論、戦争批判の発言が封殺されて  
いた戦時下でも、この若者は妹には自らの戦争への思いを率直に伝えていた。

「敗北必至」と予見していた戦争に、玉砕を前提の特攻兵として出撃しなければならな  
かったことは、極限状況に固有の不条理以外の何ものでもない。

徴兵以前の短い学生時代には、哲学書や故郷の山岳でのスキー、音楽に親しんだのに、  
徴兵が彼の生を暗転させた。クロウチェの自由主義哲学を愛した若者にとり、絶対服従の

軍隊と、生の希望を絶たれた特攻隊入りは「塞がれた道」に他ならなかった。

兄3人が戦死した、妹の悲哀は想像を絶する。兄がいかに生き、特攻兵として死んだかを証言、語り伝える姿からは、戦争の酷さと平和の大切さを次代に伝えることの重要性を痛感する。

## 6-1. 戦災孤児から洋画家への半生

戦争下、親が戦地で、また空襲や病いなどで亡くなり、天涯孤独となった戦災孤児たちの戦後の生はいかに織り成されてきたのだろうか。孤児、みなし子と言うと「不幸な生い立ち」というラベルが貼られかねないが、先入観を排して、当事者にその生活史を聞く作業が大切であろう。

以下は、自分のルーツ不明という戦災孤児の逆境に負けることなく画家を敢然と志し、雄大な北アルプスを望む安曇野の大自然を描き続ける作家へのインタビュー記録である。

画家の新作展「信州安曇野の自然」が2002年、都内で開催された折に出会った。

個展を開いたのは、長野県池田町会染在住の洋画家、長井朋人さん。「残雪の常念岳」など四季折々の情感豊かな風景画を出展、好評を博した。スペインなど内外で多くの個展の実績があるプロ作家だが、池田町の絵画創作の交流にも積極的に参加。池田町洋画クラブに参加し、寺松宏会長ら30人の会員と親睦を暖め、毎年町の美術館での展覧会にも出品している。

会場で長井さんは、戦災孤児から画家をめざし、安曇野を創作拠点にした波瀾の半生を語った。以下の談話は、悲哀めいたニュアンスは皆無で、逆に、孤児であった生い立ちを相対化し、小さな笑い、ユーモアを交え、淡々と語られたことが印象に残る。

「私は戦災孤児で出生の地も両親が誰なのかも分からぬまま、放浪中の四歳の時に横浜で米軍兵士に拾われ中野の兵舎に住まわせてもらい、その後、東京・築地で水産加工業を営む長井家の世話になった」という。「米軍の若い兵士たちからは、可愛い幼児と親切にしてもらった」と回想。

幼年期から絵が得意で、小学生時代に絵の展覧会で賞品をもらいやみつきになった。都立青山高校生の時は絵のコンクールで相次いで受賞。薩摩揚げなど販売の長井家が家業が傾き、高校在学中に自活し、牛乳配達で生活を支えた。卒後は転々。新宿・歌舞伎町でサンドイッチマンなどしながら絵画の修行に打ち込んだ。「孤児だったため、自分の生年月日は青年期に、自分で昭和15年1月15日と決め戸籍を作った」と語った。

30歳のとき、高校の同級生の妻と2人で、スペインに絵の修行に旅立った。「フランス、ポルトガルら南欧を何度も取材旅行し最高の思い出。このため欧州の安宿事情には詳しいです」。

「自分のルーツ不明から放浪癖があり、帰国後、広島県の山中に数年暮らし、15年前に池田町の使われなくなった公民館を借りて住まい兼アトリエにした」という。5年前、池田の会染、通称「はんざいけ」と呼ばれる半在家にアトリエを造った。「住めば都で安曇野の人は心が優しい。絵描きは世俗の利害と関係なく創作一途に生きられるのがいい」と話した。

## 6-2. 画家の半生の考察

戦災孤児だった幼年の長井さんを救ったのは、在日米軍の若き兵士たちであり、次いで、築地で水産加工業を営む長井家の人々だった。寝食の面倒を見てくれる人々が現れねば、敗戦後の混乱期には幼児ゆえに命さえ危機に直面したのではないかと。

彼は、幼年期に出会った恩人への謝意を示しつつ、インタビューでは「自活、自立への道のり」を強調した。

戦災孤児という天涯孤独な生い立ちは、幼年期のその瞬間だけを見れば、逆境、不幸なルーツだが、人間は、未来に向け生を自ら作り出す存在であり、逆境を乗り越えて生きる道を示唆している。

他人の恩情に頼っていたのでは、人生の活路を切り開きチャンスをつかむことはできない。高校時代には、朝3時に早起きし牛乳配達をしながら自活していた。絵に熱中した動機が、絵が好きで得意だったことと、懸賞稼ぎだったことも語った。青年期に牛乳配達、サンドイッチマンなどで生計を立てながら、「絵描きとして自立」に執念を燃やし、スペインでの武者修行を経て、人気画家になった半生からは、絵画と人生を一体化させた強靱な志向性がうかがわれよう。彼が今、創作の舞台とする安曇野は自然と自由愛する芸術家が多く心休まる理想郷である。

## 7-1. 戦中・戦後を生きた女性の日記から学ぶ草の根の取り組み

庶民の日記は、自分と家族の暮らしの記録であると同時に、現代史の「虫瞰図」、虫の目としての草の根の時代の記録として重要である。以下は、日記の現物の収集保存と研究分析、日記文化の大切さを訴える人々へのインタビュー記録からの報告である。

「日記と歩む過去・現在・未来」と題する移動日記展を、日記に関心高い松本、塩尻市、安曇野で開催したいという構想が「女性の日記から学ぶ会」（事務局・千葉県八千代市）の会員間ではぐくまれ、2002年秋に塩尻市で実現した。

昨冬、港区の信州そばの名店「信州坊主」で、坂北村の地酒「山清」を愛飲する信州人の集いが開かれ、そこで「女性の日記から学ぶ会」代表の島利栄子さんが「日記は社会の



遺産で死蔵してはもったいない。社会に出し風を当てれば生き返る」と活動報告した。

同郷の松本出身で同店経営の石田武秀さんは草の根文化運動に熱き思いを抱き「同会では、松本平の多くの方の日記の読解作業も重ねている。故郷での移動展を応援したい」と張り切り応援した。

島さんは坂北村に生まれ、信州大学に学び、結婚後、夫の転勤で北海道、山口県と移り、今は千葉県八千代市在住。松本はじめ各地で18年前から女性たちの聞き書きを続ける中、「捨てられそうな1冊1冊の日記が庶民の大切な歴史の証言集」との思いを深めた。

同会は平成8年に創立、「日記を保存し活用策を考え、次代に伝える女性文化の有様を考える」が目標。会員は約200人で全国にいるが、松本平の会員が一番多い。郷土出版社の神津良子社長も会員だ。男性が約40人参加、最高齢は93歳の男性。日記、家計簿らの1級資料を収集、和気あいあいと楽しみながら学んできた。

研究者ではなく生活者の視点で日記を掘り起こし「学んだことを社会還元を」と努めてきた。同会は昨年、シャルレ主催、読売新聞社後援の女性奨励賞を受けた。全国規模で活動し地域還元めざす女性団体を対象の賞で574団体が応募し受賞11団体に入った。

島さんは、松本市入山辺の松崎宗子さん（昨年死去）から日記を借り、10人で3年かけ読み込んだ。「出征中の夫との通信の備忘録として書き始め、戦後は1日1行の行動のメモと支出の内訳が記録され、簡潔な記述の中に、戦中から戦後、高成長期と変容する山間部の生活の諸相が読みとれる」と語った。平成11年に、島さんら9人の会員が松崎さん宅を訪ねた。「宗子さんが喜ばれ、赤飯を炊いて大ご馳走下さり心温まる思い出になった」という。

同会は昨年、山口県、京都府など3カ所で、戦中戦後の日記、子供の日記、家計簿などを展示し、講演や会員の交流を行う移動日記展を開き好評だった。島さんは「移動日記展では、地元の方の日記に光を当てている。松本市の女性の金井芳美さん、坂北村で婦人会リーダーから村会議員を務めた丸山鈴子さんはじめ、たくさんの方の日記があり、故郷で移動展の時には紹介したい」と抱負を語った。

信州は日記を書き続ける人が多いという。「はじめ、頑固、義理人情に厚くしっかりと生きる信州人には日記文化の土壌がある。松本で日記の文化運動が盛んになったらうれしい」と夢を話した。

塩尻での日記展に先立ち、同会「6周年の集い」が千葉県八千代市で催された。

島さんは会場に訪れた約60人に「戦時下で大変な思いをされた方々は『生き残った自分たちが伝えていかなければならない』という思いが強い。100の戦中・戦後の日記と出会ったら100のエピソードがあることに驚く。日記を書いた人の尋常ならざるエネルギーを感じて欲しい」と訴えた。

島さんらのグループは松本市入山辺の故・松崎宗子さんの日記のうち昭和18年から40年

までの21冊を分析したことを詳細に報告。会場には「松崎日記のふるさと」と題し入山辺一帯の手書き地図や風景写真、宗子さんの詳しい年譜、入山辺の歴史の特別展示も行われ感動が広がった。

史料班の片岡良美さんは「山間部の集落に生きる松崎日記の一見淡々とした生活の記述から、戦中から戦後、そして高度経済成長期と変わる社会の様子が読み取れる」と語った。戦時の日記からは妻宗子さんの夫への夫婦愛が伝わり参加者は松崎日記に見入っていた。

豊科出身で赤坂で信州蕎麦の名店「信州坊主」経営の石田武秀さんは「宗子さんの日記には信州女性の地に足がついた生き方と家族愛が伝わり心打たれる」と話した。

昭和18年1月「18年度元旦の朝は来た。今年の元旦は夫が戦地へ行っているの、なんと無く心が引きしまっていた」で始まる日記は「今日は夫から便りがまいりました」「今日御諏訪神社の守りを入れて戦地へ手紙を出しました」など、しばらくは戦地の満州にいる夫との手紙のやりとりが中心に書かれている。昭和18年、19年に宗子さんから夫に出された手紙（荷物含む）の数は139回、155回に及び、一方戦地の夫から宗子さんに出された手紙はそれぞれ39回と48回だった。

だが、昭和19年12月2日「かへって見れば夫より手紙が来ていたけれど返信不要のこと故、なんとなく寂しさがこみ上げた」、同16日「今日は夫へ出した11月22日の手紙が『不明差出シ人戻シ』としてかへったが私は何となく寂しい気がしてならない」と書かれた後、4ヶ月以上も夫から便りのない期間が続く。文面からも宗子さんの心配が伝わってくる。ようやく昭和20年5月24日「今日夫の便りが来て飛び立つ程のうれしさであった」、そしてついに翌昭和21年7月18日「今日懐かしの夫が復員。家中も私も夢の様、只うれしさが胸一杯」という記述が見られる。夫の出征中、ひとり農業で、家族の生活を支えてきた宗子さんの強さと安堵感が伝わる。

会場では、全国規模の移動日記展で集められた約100点の日記も展示。育児日記や母子手帳を展示するコーナーもあった。

島さんは「子供を産まなくなった若い親たちは子育てで頭を抱えるようになった。でも、そんなとき日記は教えてくれる。いつの時代も親たちは悩み、喜び、学んできたことを。塩尻の移動日記展で若い人たちにそんな人々の思いを伝えたい」と熱く語った。

## 7-2. 女性の日記に学ぶ活動の考察

歴史は、政治経済などをマクロに記録の「鳥瞰図」と、庶民の生活者としてのミクロなまなざしからの「虫の目」の生活記録の双方が備わって初めて、生きた記録となるのではないか。前者は、歴史家の歴史記述、国の「大日本史料」、自治体の地方史などの行政予算を投じた史料編纂と、歴史研究の技法を学んだ専門家が担ってきた。

しかし歴史の主体が庶民大衆ならば、庶民の声が発露の歴史記録刊行は重要課題であろう。「女性の日記から学ぶ会」の活動は、庶民の生活記録としての日記の社会的価値の大切さを訴えている。

戦中、戦後の「女性の日記」の重要性は、敗戦までの「男尊女卑」「男は外、女は内」という因習的な性差別、文化的性差としてのジェンダー問題が関わっている。戦前の男性支配型の家制度のもとでは、庶民の女性の発言、主張が社会に広く訴えられ伝わることは稀有であった。妻、嫁、母として女性たちが、何に憤り何に喜びを感じていたのか、日記は貴重な現代史の記録である。

同会の活動に男性も多数参加していることも、時代変化を示している。男支配型の旧来の日本社会の在り方には、性差を越えた異議申し立てが続いている。

## 8. フィールドワークの可能性を求めて

先述したインタビュー記録は、特攻兵、戦災孤児、戦中・戦後を生きた女性たちの生に関して、聞きとりしたもので、3つの記録は各々が独立したものである。「フィールドワークの開かれた可能性」を問うための実践報告として、3編を呈示した。

特攻兵、女性の日記に関しては、インタビューの対象者は、戦争体験などを語り伝えることについて明確な問題意識と使命感を抱いており、文献資料なども入手できた。戦災孤児の聞きとりは、予想外の産物である。北アルプスと安曇野を描く画家の個展に、作品を見るために訪ねたところ、画家の方から、戦災孤児の生い立ちと生活史を自発的に語られた。

事前に質問項目を考えて、順に尋ねていくアンケート調査、質問票に答えてもらう数量型調査には、調査する側の先入観とステレオタイプが入りがちで、こうした手法で聞きとりの相手の生活世界の理解は深くまで可能であろうか。

フィールドワーカーと調査研究の対象者、対象とする生活世界の関係は、過去・現在・未来の時間軸の中、変容する可能性が大きい。その意味では、フィールドノートは、調査した時点までの現在完了型の記録なのであり、調査研究はたとえ終止符を打っても、生活世界は更新を続ける。フィールドワークは、社会問題の事実発見、現代史の闇に消えた問題の掘り起こし、異なる文化、価値の異なる他者理解はじめ、何よりも実践的な調査研究の手法である。

最後にフィールドワークの実践的学習方法を考察したい。優れたフィールドワークの作品は生活世界の小宇宙を生き生きと浮き彫りにしており、学び手の知的関心を刺激し視野を開く。同時に学生たちがフィールドワークの基礎を学んだうえで、家族、地域のまちづくり、福祉運動などのフィールドワーク体験を積み重ね、授業で調査報告することは、社

会調査の実践トレーニングに通じよう。教室の外で実施したフィールドワークの成果を互いに教室に持ち寄って報告、ディスカッションすることは、実社会の多様な生活者に学び新しい風に触れる第一歩となる。今日ほど、問題解決型の学びが重要になっている時はなく、フィールドワーク実践から「ストリート・ウィズダム」にふれることは大切と考える。

## 文献

- |         |      |                         |
|---------|------|-------------------------|
| 本 多 勝 一 | 1983 | 『ルポルタージュの方法』朝日新聞社       |
| 福 岡 安 則 | 2000 | 『聞き取りの技法』創文社            |
| 川喜田 二 郎 | 1973 | 『野外科学の方法』中央公論社          |
| 児 玉 隆 也 | 2000 | 『一銭五厘たちの横丁』岩波書店         |
| 小 池 和 男 | 2000 | 『聞き取りの作法』東洋経済新報社        |
| 奥 村 隆 編 | 1997 | 『社会学に何ができるか』八千代出版       |
| 町 村 敬 志 | 1999 | 『越境者たちのロスアンジェルス』平凡社     |
| 箕浦 康子編著 | 1999 | 『フィールドワークの技法と実際』ミネルヴァ書房 |
| 宮 本 常 一 | 1960 | 『忘れられた日本人』平凡社           |
| 佐 藤 郁 也 | 1992 | 『フィールドワーク』新曜社           |
| 佐 藤 郁 也 | 2002 | 『フィールドワークの技法』新曜社        |
| 関 満 博   | 2002 | 『現場主義の知的生産法』筑摩書房        |
| 須 藤 健一編 | 1996 | 『フィールドワークを歩く』嵯峨野書院      |
| 立 花 隆   | 1984 | 『知のソフトウェア』講談社           |
| 梅 棹 忠 夫 | 1969 | 『知的生産の技術』岩波書店           |
| 山 田 勇   | 1996 | 『フィールドワーク最前線』弘文堂        |